

書評と紹介

五十嵐仁・木下真志／
法政大学大原社会問題研究所編

『日本社会党・総評の軌跡と内実』

—— 20人のオーラル・
ヒストリー』



評者：梅崎 修

1 組織オーラル・ヒストリーの継承

本書は、日本社会党と総評を対象にした20名のオーラル・ヒストリーである。本書の元になった記録は『大原社会問題研究雑誌』に連載されていたが、1冊の本の形で編集されたことで読み易い形になった。

オーラル・ヒストリーには、3つの形式があると言われている(清水, 2003 参照)。第1に、個人の人生史全体を対象として回顧録を作るように1人の人物に対して複数回の長期インタビューを行うライフ・オーラル・ヒストリー、第2に、1つのテーマを設けてそのテーマに関わる人々に対して質問範囲を限定したインタビューを行うテーマ・オーラル・ヒストリー、第3に、1つの組織を対象として組織のメンバーや元メンバーにインタビューを行う組織オーラル・ヒストリーである。本書は、日本社会党と総評の組織オーラル・ヒストリーである。

組織オーラル・ヒストリーは、テーマ・オーラル・ヒストリーを発展させたものと定義される。政策決定や事件などの1つのテーマにだけでなく、組織として関係した複数のテーマに

ついて語られた史料となり得る。だが、組織オーラル・ヒストリーは、テーマの網羅性などを目指すので、テーマ・オーラル・ヒストリーよりも時間も手間もかかると言える。

日本の労働史オーラル・ヒストリーの研究史において、大原社会問題研究所は、早くから労働史オーラル・ヒストリーを組織的に開始した団体であり、そのオーラル・ヒストリーの特徴は組織オーラル・ヒストリーであった(Umezaki, 2019)。

吉田(2009)によれば、大原社会問題研究所は、はじめは音声記録や文字起こしされた資料(トランスクリプション)を公開するという意識は低く、オーラル・ヒストリーは文書史料を読み解くための補助調査という位置づけであった。その後、1979年発足の「産別会議研究会」以降、史料公開が行われるようになった。本書は、大原社会問題研究所編(1996, 2000, 2005)に続く、過去の調査プロジェクトを継承した新しい組織オーラル・ヒストリーの書籍化と言えよう。

2 本書のオーラル・ヒストリー紹介

書名には、「日本社会党・総評」とあるが、分量的には日本社会党が15名、総評が5名であり、前者に偏っていることがわかる。まず、本書の構成と語り手一覧を紹介しよう。なお、歴史史料としての本書の価値を考えた場合、総評の組合リーダーを対象にしたオーラル・ヒストリーは他にもあり(Umezaki, 2019 参照)、他のオーラル・ヒストリーと併用しながら使う資料と言えよう。一方、日本社会党については、本書が収集した証言は多く、将来、日本社会党史の歴史研究を大きく前進させる可能性を秘めている。

はしがき
 解題
 第I部 日本社会党
 1 構造改革論争
 第1章 加藤宣幸：構造改革論再考
 第2章 伊藤 茂：回顧 私と社会党
 第3章 初岡昌一郎：私からみた構造改革
 第4章 曾我祐次：日本社会党における佐々木更三派の歴史——その役割と日中補完外交
 第5章 仲井 富：戦後革新と基地・公害・住民運動
 第6章 高見圭司：日本社会党青年部再考——『NO！9条改憲・人権破壊』をもとに
 2 社会主義協会
 第7章 上野建一：社会主義政党的確立をめざして
 第8章 横山泰治：社会党生活32年——社会民主主義とマルクス主義の狭間で
 第9章 細川 正：もう一つの社会党史——党中央本部書記局員としてマルクス・レーニン主義の党を追求
 3 飛鳥田一雄～田辺誠委員長時代
 第10章 船橋成幸：飛鳥田一雄さんとともに歩んだ社会党
 第11章 海野明昇：社会党本部書記から中央執行委員会を振り返って
 第12章 前田哲男：私が見てきた社会党の防衛政策
 4 細川護熙政権～村山富市政権
 第13章 園田原三：時代に生きた社会党と村山連立政権
 第14章 浜谷 惇：政権と社会党——1980～90年代の政策審議会
 第15章 橋村良夫：総評解散後の労働組合と社会党
 第II部 総評
 第16章 谷 正水：回想の総評運動——1960～70年代を中心に
 第17章 塚田義彦：太田薫氏と労働運動を語る
 第18章 梁田政方：日本社会党・総評時代の日本共産党の労働組合運動の政策と活動について

——1970～80年代の総評との関係を中心に
 第19章 公文昭夫：私が歩んできた社会保障運動——総評・中央社保協体感の記録
 第20章 富塚三夫：総評運動と社会党と日本社会党・総評関連年表
 関連資料

加えて、本オール・ヒストリーの特徴として、主にスタッフの人々が対象者に選定されている点があげられる。この選定方針は、編者の五十嵐仁氏の以下の記述からも明らかである。

「聴き取りの対象は国会議員や幹部として活躍された「ライン」よりも、裏方として実際の活動を担った「スタッフ」を重視して選定した。これらの人々こそが社会党や総評の規制や内実をよく知っており、実際の姿を浮き彫りにする上で貴重な証言が得られるのではないかと考えたからである。(p.4)」

日本社会党の書記局には、著作を残している人も少なくないが、政治家に比べると「取材記録」や「証言」は残っていない。その一方でスタッフは、政治家や組合リーダーによる権力闘争から「一定の距離」を持ち得るがゆえに、事実の観察者としては適していると言えよう。すなわち、公式記録に残されていない「内々の話」ができる人たちなのである。そのうえ、大学卒業とともに日本社会党や総評に入職した人も多いため、外部からは掴みにくい組織文化の体現者とも言える。

一例であるが、本書において加藤宣幸氏は、成田三原則について「あれは私が書いたのです(p.49)」と話し、構造改革という言葉に関しても「あれは私が書いたのです(p.49)」という歴史的な証言をしている。このように、公式には記録公開されていない組織内意思決定が、このオール・ヒストリーには記録されている。こ

の他、日本社会党による消費税反対にも一部の労働組合からは反論があった事実、また選挙の公認における組織内調整などは内々の話と言えよう。

さらに、スタッフから見た政治家や組合リーダーの人物評は、オーラル・ヒストリーだからこそその情報と言えよう。我々は、イデオロギー対立や実際の行動によって政治家や組合リーダーを判断してしまう。しかし、実際に横山泰治氏が「派閥というのは、やはり人間的な付き合いや肌合いが主でしょうね。(p.263)」と語るように、この「肌合い」を掴まなければ、政治を把握することは難しいのである。また、船橋成幸氏による「飛鳥田さんにとってみれば、掃除のおばさんも金日成もミッテランも同じ人間じゃないか。そういう感覚だったんですね。これはあの人の一番ユニークな点だったと思います。(p.324)」という発言は、亡くなった政治家の人間的な魅力を伝えてくれる。

3 読解の可能性

以上のように本書の中には、新事実を伝える数々の歴史証言がある。600ページを超える20名のオーラル・ヒストリーの中に含まれている新事実の語りを批判的に読解し、新たな歴史解釈を生み出すことは、これからの研究者たちに任されていると言えよう。この短い書評で、そのすべてに触れることはできないが、現時点で評者が考えた本オーラル・ヒストリーの2つの読解可能性を紹介したい。

第1に、本オーラル・ヒストリーを使うと、日本社会党や総評内で使われていた言葉に対して歴史文脈の理解ができる点があげられる。梅崎(2012)では、文書か口述かという保存形式の違いだけではなく、資料から入手される情報が「誰が」「誰に向かって」「どのような状況で」「どのような語り方で」発言したかという

文脈性によって内容が変化するかどうかという分類軸を加えるべきであると主張した。オーラル・ヒストリーは、文書史料と比べて文脈的情報が入手されやすいという特徴を持つ。本オーラル・ヒストリーでも、数々の言葉の文脈的な解釈が可能になっている。

例えば、加藤宣幸氏は、「我々は党内左派から改良主義と攻撃されるのが怖くて、構造改良という「改良」という言葉をやめて改革という言葉で、私が造語しました。(p.34)」と語り、また塚田義彦氏も「当時は改良主義というのは「墮落の典型」のような蔑称で、非情にばかにされた。(p.554)」と語った。これらの発言は、当時、改良という言葉が党内でどのように受け入れられていたかを伝えている。

また、同じように曾我祐次氏は、社民という言葉に関して、「社会民主主義イコールで「社民」という言葉を使うことを佐々木さんはきらっていました。鈴木さんも私の知っている限りにおいて「社民」という言葉はあまり好きではなかったようです。(p.138)」と語っている。このような言葉に関する文脈的な情報は、同時代を経験した研究者ならば、多少は理解できることかもしれないが、同時代人ではない研究者にとっては分かりにくいと言えよう。このオーラル・ヒストリーによって言葉の文脈的理解ができることによって、文書史料も含めたすべての史料の読み方も変わってくると考えられる。

第2に、本オーラル・ヒストリーは、従来、明らかにされて来なかった党内や組合内の対立構造も把握することができる。従来の文献でも、日本社会党・総評におけるイデオロギー対立、派閥対立、および路線対立は記されている。だが、本書では、さらに詳しく、時期区分を踏まえながら構造改革派、社会主義協会派、鈴木茂三郎派(後に佐々木更三派)などの派閥、さらに国政と地方政治の違いもインタビューされて

おり、今まで明らかではなかった数々の対立の構造を読み解くことができる。

加えて、これら1つひとつの対立の語りを通読すると、社会運動における青年とベテランの世代対立という新たな側面を読み解くこともできる。「青年」とは、政治運動にしても労働運動においても過激化しやすいが、同時に運動自体を盛り上げる存在でもある。高見圭司氏が以下のように語るように、日本社会党はその運動を強めるために、共産党と対抗しながら青年のエネルギーを組織化する必要があった。

「社会党の場合、社会党青年部ではまずいのではないか。やはり民青のように大衆組織をつくるべきだ」という意見が指導部の中であつたようです。それで社青同をつくることになった。(p.213)」

その一方で、初岡昌一郎氏が「社会党青年部の場合、何と言っても社会党の政策と行動を批判することが主要な役割のひとつでした。(p.114)」と言うように、青年たちは、執行部批判をする存在でもあった。総評についても高見圭司氏は、「そのメンバーも平和友好祭運動をやった、全国の総評の青年部関係です。だから組織が広がるはずです。内容は全部、総評の指導部批判ですから、岩井や太田はいやがります(笑)。共産党も反戦青年委員会を批判した。だから太田、岩井派、とくに社会党内の社会主義協会派はこれをえらくいやがりました。(p.208)」と語る。

さらに、加藤宣幸氏の次のような発言によれば、それら青年を組織内に置くのか、外に置くのかについて党本部にも戦略が存在したことになる。このように世代対立という切り口で社会運動史の数々の対立構造を解釈し直すこともできる。

「たとえば社会党青年部の場合、党内にあると反幹部闘争になりやすいので、我々が党組織の外郭に社会主義青年同盟をつくり、外で大衆的な青年運動をもっとやるべきではないかという提案をしたのに対し、浅沼書記長は、戦前からの経験で、青年部は中に置くとやかましいが、外へ出せば若い者はみんな共産党にいつてしまうから、中に置いておくという理論でした。(p.36)」

以上、2つの読解の可能性を示したが、本書の中に、この他に数々の読解の可能性を探することができる。

4 残された方法論の議論

本オーラル・ヒストリーが研究者の共有財産として多くの新情報を公開していることは高く評価できるが、方法論に関しては、議論の余地があると考ええる。例えば、本書のオーラル・ヒストリーは、研究会形式でインタビューが行われている。つまり、はじめに語り手が一方的に話し、その後、質疑応答が行われている。

聞きたいという人が多ければ、研究会方式も致し方がない部分もあるが、オーラル・ヒストリーが反復的なコミュニケーションによって語り手の想起を促す調査法であるとする、一方的な報告になる研究会方式は、語り手の「準備しすぎ」を生みやすく、質問から生まれる「未計画な語り」が少なくなる。もちろん、本書には、質疑応答の部分があり、ここでの語りは前半の報告よりも、対話による「思わぬ語り」が生まれている。しかし、研究会形式なので、質疑応答の部分は限られており、かつ質疑応答の部分が編集方針で削除されている章もある。

要するにオーラル・ヒストリーを組織的に行う場合、反復的なコミュニケーションの場のデザインに関して、本書のオーラル・ヒストリーに

は改良の余地があり、さらなる歴史証言が入手される可能性もあったのではないかと。これは、無いものねだりなのかもしれないが、聴き手を3チームに分けてそれぞれインタビューを行うような調査プロジェクトの方がよいのかもしれない。このような議論は、今後、組織的なオーラル・ヒストリーの継承によって、方法論的に改良(改革)されていく課題であろう。今後の

組織オーラル・ヒストリー・プロジェクトの継続に期待したい。

(五十嵐仁・木下真志／法政大学大原社会問題研究所編『日本社会党・総評の軌跡と内実——20人のオーラル・ヒストリー』旬報社、2019年3月、660頁、定価6,300円+税)

(うめざき・おさむ 法政大学キャリアデザイン学部教授)

【参考文献】

梅崎修 (2012) 「オーラル・ヒストリーによって何を分析するのか——労働史における〈オーラリティー〉の可能性」『社会政策』11, pp.32-44。
 法政大学大原社会問題研究所編 (1996) 『証言 産別会議の誕生』(総合労働研究所)。
 —— (2000) 『証言 産別会議の運動』(御茶の水書房)。
 —— (2005) 『証言 占領期の左翼メディア』(御茶の水書房)。
 清水唯一朗 (2003) 「日本におけるオーラルヒストリー——その現状と課題、方法論をめぐって」『KEIO-GSEC CRONOS Working Papers』3 (4) 1-10。
 吉田健二 (2009) 「大原社会問題研究所のオーラル・ヒストリー (第8章)」法政大学大原社会問題研究所編『人文・社会科学的研究とオーラル・ヒストリー』御茶の水書房, pp.183-223。
 Umezaki Osamu (2019) “Labor Oral History in Japan” *Japanese Research in Business History* (36) forthcoming.

有斐閣 出版案内

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17/Tel.03-3265-6811
<http://www.yuhikaku.co.jp/>
(表示価格は税別。消費税込みの金額が定価です。)

◎図書目録送呈◎

現代アジア経済論

(有斐閣ブックス)
 遠藤 環・伊藤亜聖・大泉啓一郎・後藤健太郎編『アジアの世紀を学ぶ』
 アジア経済のダイナミズムを描く。「老いていくアジア」の章では、アジアの社会保障制度を整理し、加速する少子高齢化を分析。
 二〇一八年刊

福祉国家の制度と組織

(AS判)
 佐々木伯朗著『日本の特質の形成と展開 戦後日本における財政システムが、なぜ他の先進国と比較して特殊な性格を帯びるに至ったのか、制度と組織に着目して検証する。』
 二〇一六年刊

21世紀家族へ

(有斐閣ブックス)
 第4版 落合恵美子著『家族の戦後体制の見かた・超えかた アジア諸国の家族も視野に入れながら、21世紀初頭の現実をとらえ、新たに2章を書き下ろした。ますますパワーアップした、家族社会学の基本書。』
 二〇一九年刊

社会福祉をつかむ

(テキストブック形式)
 第3版 稲沢公一・岩崎晋也著 『援助すること』をめぐる実践的な問いから、それを支える理念・政策を、短いユニット単位でわかりやすく解説した入門テキストの最新版。
 二〇一九年刊

社会福祉のトポス

(有斐閣ストライプ)
 岩田正美著『社会福祉の新たな解釈を求めて 戦後の「広義の社会保障」と関連政策をいくつかの異なった「事業集合」として捉え、厚生(労働)白書を主な具体的素材として丹念に分析。』
 二〇一六年刊

生活保障のガバナンス

(AS判)
 大沢真理著『ジェンダーとお金の流れで読み解く 一九八〇年代以降の生活保障システムを分析し、日本の社会・経済の脆弱性を照らします。「生きにくさ」とジェンダーの関わりを明らかにする。』
 二〇一四年刊

ジェンダーの政治経済学

(AS判)
 原 伸子著『福祉国家・市場・家族・ベツカー「新家庭経済学」における女性労働の分析とその後のフェミニスト経済学の発展を追い、福祉国家におけるワーク・ライフ・バランスの精査を行う。』
 二〇一六年刊